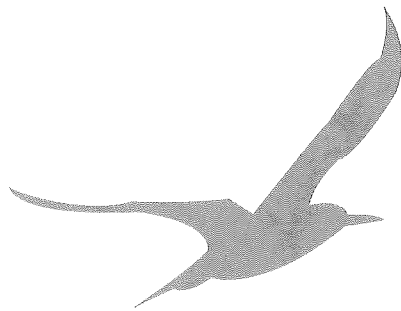


第 16 回山階芳麿賞贈呈式と記念シンポジウム

「かたちの多様性」

平成 22 年 9 月 23 日 (木・祝) 14:00 ~ 16:00

けやきプラザ ふれあいホール



主催：(財) 山階鳥類研究所 共催：朝日新聞社

後援：文部科学省、環境省、我孫子市

(財) 世界自然保護基金ジャパン

(財) 日本自然保護協会、(財) 日本野鳥の会

(財) 日本鳥類保護連盟、日本鳥学会



2010年 国際生物多様性年



我孫子市制 40 周年記念事業

目 次

プログラム	3
山階芳麿賞贈呈式にあたって	4
第 16 回山階芳麿賞 森岡弘之氏への贈呈理由	5
第 16 回山階芳麿賞受賞者の紹介	6
シンポジウム開催趣旨 「かたちの多様性」	7
「飛ぶためのからだ」ができるまで : 恐竜の挑戦	8
「飛ぶかたちの完成品」: 鳥の秘策	9
山階芳麿賞の紹介	10
山階鳥類研究所の紹介	11

第 16 回山階芳麿賞贈呈式と記念シンポジウム

「かたちの多様性」

平成 22 年 9 月 23 日 (木・祝) 14:00 ~ 16:00

けやきプラザ ふれあいホール

千葉県我孫子市本町 3-1-2

第 16 回山階芳麿賞贈呈式

山階芳麿賞贈呈式にあたって 選考委員紹介	山階鳥類研究所総裁	秋篠宮文仁
贈呈理由	山階芳麿賞選考委員長	山 岸 哲
表彰状と記念メダルの贈呈	山階鳥類研究所総裁	秋篠宮文仁
副賞「朝日新聞社賞」の贈呈	朝日新聞社広報・環境担当	両 角 晃 一
受賞者あいさつ	国立科学博物館名誉研究員	森 岡 弘 之

記念シンポジウム 「かたちの多様性」

司会：山階鳥類研究所所長 林 良博

◆「飛ぶためのからだ」ができるまで：恐竜の挑戦

山階鳥類研究所客員研究員 真 鍋 真
国立科学博物館地学研究部研究主幹

◆「飛ぶかたちの完成品」：鳥の秘策

山階鳥類研究所客員研究員 遠 藤 秀 紀
東京大学総合研究博物館教授

◆フロアの皆さんと真鍋、遠藤の「鳥・けもの・恐竜・人類」談義

閉会のあいさつ

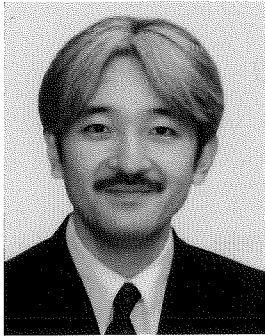
朝日新聞社広報・環境担当 両 角 晃 一

総合司会：山階鳥類研究所副所長 尾崎清明

山階芳麿賞贈呈式にあたって

財団法人 山階鳥類研究所 総裁

秋篠宮文仁



財団法人山階鳥類研究所は、平成4年に設立50周年を迎えました。それを記念して創立者である故山階芳麿の功績を讃え、国内において鳥学および鳥類保護に顕著な功績のあった方に贈る「山階芳麿賞」を創設いたしました。

本日、その山階芳麿賞の第16回贈呈式、ならびに記念シンポジウムを開催できますことは、私にとりまして大きな喜びであります。このたび賞を贈呈する国立科学博物館名誉研究員の森岡弘之博士に心からお祝いを申し上げます。

このたびの受賞者である森岡弘之博士は、長年にわたって比較形態学ならびに機能解剖学の視点に立ち、鳥類の分類学と系統学に大きな貢献をしてこられました。分子生物学が分類学や系統学の中心になりつつある今日、博士のお仕事は鳥そのものの情報を解析するという意味で、きわめて重要なことと考えます。

そのような博士のご業績と本年が国際連合の定める国際生物多様性年であることに因んで、記念シンポジウム「かたちの多様性」をあわせて開催することにいたしました。皆様にとって、生物多様性についての理解を深めるよい機会になれば幸いです。

森岡博士ならびに博士の薫陶を受けられた方々のご研究が今後ますます発展し、一層の活躍をされますことを祈念し、私の挨拶といたします。

財団法人 山階鳥類研究所 理事長

島津 久永



本日、第16回の山階芳麿賞贈呈式を開催することができましたことは誠に喜ばしく、これもひとえに選考委員はじめご関係の皆様のご支援の賜物と、感謝いたしております。

このたび受賞者となりました森岡弘之博士は、日本における鳥類分類学を永年に亘って支えてこられました。博士の幅広いご研究とその業績に深く敬意を表するとともに、心より受賞のお祝いを申し上げます。

山階鳥類研究所は1984年の我孫子移転以来、昨年で25周年を迎えました。また我孫子市は本年、市制施行40周年を迎えました。これらのことを記念して、本年は特に山階芳麿賞の贈呈式とシンポジウムを、我孫子市で開催することといたしました。ご共催いただきました朝日新聞社および、文部科学省、環境省、我孫子市をはじめとするご後援の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

第 16 回山階芳麿賞 森岡弘之氏への贈呈理由

山階芳麿賞選考委員長 山岸 哲



森岡弘之氏は、鳥類の比較形態学、機能解剖学の手法による分類学に大きな業績を残されました。

属レベル以上の類縁関係を研究する大分類学の分野では、主にスズメ目とその近縁の鳥類について数多くの研究を行っておられます。たとえば、Walter Bock 氏との共同研究でミツスイ科について、単独の研究としてアマツバメ科について、機能解剖学的な観点から、顎の関節と筋肉の形態の適応と機能を調べ、進化と系統を考察しました。アマツバメ科については、飛びながら小昆虫類を捕食するのに高度に適応している点で共通するツバメ科との比較で、両者が外部形態や頭骨の構造においては類似しているが、顎筋においては異なっており、骨格一筋肉系の仕組みは違うことを示し、ツバメ科はスズメ目の鳥で、アマツバメ科とは別個に進化したとする従来の学説を支持する結果を得られました。

また種レベル以下の類縁関係を研究する小分類学の分野では、日本産スズメ目鳥類の分類に貢献しておられます。特に、「日本鳥類目録」(改訂4版、5版、6版、日本鳥学会)で分類を担当され、スズメ目鳥類の分類を整理されたことは重要な業績です。目録の作成は、識別できる種を整理し、正しい学名を与える作業であり、分類学はもとよりすべての生物学の研究に不可欠の仕事です。また森岡氏は、アカコッコ、オガサワラマシコ、オオセッカ、アカヒゲ、メグロなど日本の特産種、準特産種の類縁関係を研究しておられます。これらの研究成果の中には、メグロの分類、オオセッカの属的帰属のように、後にDNAを用いた分子分類などの結果と一致した場合も少なくありません。

このように、森岡弘之氏は、鳥類学のすべての分野の基礎となる鳥類分類学において、大分類学と小分類学の両方の分野にわたって研究成果をあげられました。そして、専門分化の著しい現代にあって、森岡氏の学識は、分類学、解剖学、形態学にとどまらず、生物地理学、生態学、行動学も含めた幅広い分野に亘っており、まさに「日本最後の鳥類学者」ということができます。「日本鳥類目録」をはじめとする学術書のほか、普及的な著作も多数執筆されており、社会に対する貢献も多大なものがあります。そこで、山階芳麿賞選考委員会は、鳥類の学術研究の功績を重視して選考する山階芳麿賞に誠にふさわしいものと判断し、第16回山階芳麿賞を森岡弘之氏に贈呈することにいたしました。

山階芳麿賞選考委員の構成 (2009 (平成 21) 年度現在)

委員長：山岸哲 ((財) 山階鳥類研究所所長 現・名誉所長)

委員：石居進 (早稲田大学名誉教授)、井田徹治 (共同通信社編集委員)、江崎保男 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所教授)、岡奈理子 ((財) 山階鳥類研究所自然誌研究室上席研究員)、岡安直比 ((財) WWF (世界自然保護基金) ジャパン自然保護室長)、長谷川真理子 (総合研究大学院大学教授)、林良博 ((財) 山階鳥類研究所副所長 現・所長)、藤原正信 (日本放送協会解説委員)、米山正寛 (朝日新聞社科学グループ記者)、渡辺茂 (慶応義塾大学文学部教授) 五十音順

第 16 回山階芳麿賞受賞者の紹介

森岡弘之博士の略歴と主要研究業績

【氏 名】 森岡弘之 (モリオカ・ヒロユキ)

【生年月日】 1931 年 12 月 18 日 東京生れ

【学 歴】 1960 年 京都大学大学院理学研究科
修士・博士課程修了
1967 年 イリノイ大学大学院博士課程
修了 PhD 取得

【職 歴】 1967 年 アメリカ自然史博物館鳥類
学部研究員
1972 年 国立科学博物館研究員
1982 年 国立科学博物館第一研究室長
1995 年 国立科学博物館動物研究部長
1996 年 同上退職

【称 号】 1996 年 国立科学博物館名誉研究員

【専門分野】 鳥類分類学・比較形態学 (骨学)・
比較解剖学 (筋肉)

【主な研究業績】

◆ The skull of *Regulus regulus*, with some remarks on the taxonomic status of Regulidae. Mem. Coll. Sci. Univ. Kyoto, (B), 27: 59-64, 1960. [キクイタダキの頭骨とキクイタダキ科の地位] ◆ Anatomy and relationships of thrushes, mimic thrushes, dippers, and wrens. Dis. Abst. (1968): 1-2, 1968. [ツグミ, マネシツグミ, カワガラス, ミソサザイの形態と類縁関係] (学位論文) ◆ Morphology and evolution of the ectethomoid-mandibular articulation in the Meliphagidae. J. Morphol., 135: 13-50, 1971. (With W. Bock.) [ミツスイ科における外篩骨-下顎骨関節の形態と進化] ◆ Jaw musculature of swifts (Aves, Apodidae). Bull. Natl. Sci. Mus., 17: 1-16, 1974. [アマツバメ類の顎筋の比較解剖学的考察] 琉球列島の鳥相

とその起源. 国立科博専報, (7): 203-211, 1974.

◆ Observations on the ecology and behavior of *Apalopteron familiare* (Aves, Meliphagidae). Mem. Natl. Sci. Mus., (11): 169-188, 1978. [小笠原のメグロ (*Apalopteron familiare*) の生態および行動に関する観察] ◆ Generic allocation of the Japanese Marsh Warbler *Megalurus pryeri* (Aves: Sylviidae). Bull. Natl. Sci. Mus., Zool., 19: 37-43, 1993. [オオセツカ *Megalurus pryeri* の属的帰属] ◆ A New Subspecies of *Zoothera dauma* (Aves, Turdidae) from Iriomotejima, Southern Ryukyus, with Comments on *Z. d. toratugumi*. Bull. Natl. Mus. Sci., Ser. A, 35(2): 113-124, 2009. [西表島産トラツグミの新亜種記載] ほか多数。



【著書】

◆ 『日本鳥類目録』改訂第4版 (共著・日本鳥学会・58年) ◆ 同改訂第5版 (共著・学研・74年) ◆ 同改訂第6版 (共著・日本鳥学会・2000年) ◆ 『動物系統分類学』追補版 (共編・中山書店・2000年) ◆ 『鳥類学辞典』 (共監修・昭和堂・04年) ◆ 『脊椎動物の多様性と系統』 (分担執筆・裳華房・06年) ほか多数。

【学会・社会活動】

日本鳥学会、British Ornithologists' Club の会員 (過去に British Ornithologists' Union、American Ornithologists' Union、British Ecological Society、日本生物地理学会等に所属)

シンポジウム開催趣旨 「かたちの多様性」

財団法人 山階鳥類研究所 所長 林 良博

本年は国際生物多様性年である。また 10 月には名古屋で第 10 回生物多様性条約締約国会議（COP10）が開催され、世界各地から 1 万人を超える人びとが参加する年にあたる。

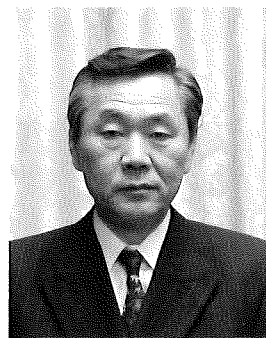
本シンポジウムは、このような生物多様性への国民の関心の高まりに呼応し、長年にわたって「鳥類のかたち」を研究してこられた森岡弘之博士の山階芳麿賞受賞を記念して開催するものである。

レッドリストによれば、絶滅している動植物は毎日 100 種以上になるという。人類が誕生したことによって鳥の絶滅スピードは 50 倍になり、この状況が続けば 100 年後には 500 倍に増えると予想されている。そうした危険な状況を改善するために、生物多様性を保全することは喫緊の課題といえるであろう。

生物多様性は、その言葉どおりに多様な内容を含んでいて、理解するのがむずかしいという意見がある。すなわち「生物多様性」には、森林や干潟など「生態系の多様性」と、同じ生態系であっても、さまざまな生き物が生息している「種の多様性」があり、さらに同一の種であっても、個体差をうみだす「遺伝子の多様性」の 3 つがそれである。

しかし、たとえ生物多様性という言葉を知らない人でも、多様な「かたち」をした生き物の存在によって、生き物の多様性を当たり前のこととして認識している。「かたち」は生物多様性を認識するための重要な要素であるといえよう。

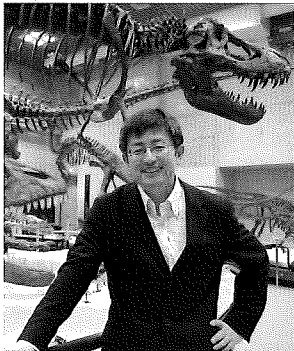
とはいえ、哺乳類の 2 倍の種数を誇る鳥類の「かたち」が、なぜ哺乳類のように多種多様でないのか。本当に鳥は恐竜の子孫であるのか。哺乳類学の遠藤秀紀博士（東京大学）と恐竜学の真鍋真博士（国立科学博物館）は、ともに山階鳥類研究所の客員研究員であり、本シンポジウムの演者として最適任の第一線で活躍している研究者である。「かたち」によって、鳥類への理解がより深まることを、企画者として大いに期待している。



「飛ぶためのからだ」ができるまで ：恐竜の挑戦

真鍋 真

財団法人 山階鳥類研究所客員研究員
国立科学博物館地学研究部研究主幹



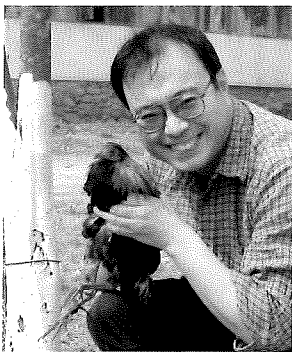
鳥類の恐竜起源説は 1990 年代後半の「羽毛恐竜」の発見以降に知られてきた感があるが、「種の起源」にも紹介されており、鳥類の起源に関する仮説の中では最も古いものでもある。しかし、当時ハクスリー Huxley がその根拠として挙げていた特徴は、現在、鳥類と近縁とされる恐竜に限定されるものではなかった。現代の恐竜起源説は、1970 年代のオストロム Ostrom の主張に溯ることができる。オストロムは始祖鳥 *Archaeopteryx* に翼がなかったら、その骨格は小型の獣脚類恐竜に良く似ていることに気がついた。ドロマエオサウルス類などの手首は、鳥類が翼を広げたり畳んだりする時に水平方向に動かす形態が見られることを指摘した。その後、ゴートイエ Gauthier が 1986 年に分岐分析によって、鳥類が恐竜の一グループであることを示した。1996 年には羽毛が恐竜の段階ですでに出現していたこと、2003 年には羽軸の前後が非対称の風切羽も出現していたことなどが明らかになった。現在では、どこまでが恐竜でどこからが鳥類か、その境界線を引くのが難しいほど連続的な進化があったことがわかっている。

鳥類に近縁だとされる恐竜ドロマエオサウルス類のマイクロラプトル *Microraptor*、トロオドン類のアンキオルニス *Anchiornis* には前肢はもとより後肢にも大きな翼があったことが確認されている。さらに、始祖鳥の後肢にも小さな翼があったことが判明している。現在では、樹上に進出した小型の「羽毛恐竜」の中で、四枚の翼を使って枝から枝に滑空できるものが出てきて、前肢の羽ばたき能力が向上するに伴って、後肢の翼が縮小していったと考えられるようになっている。一方、(1) 鳥類に近縁な羽毛恐竜の化石が始祖鳥よりも後の時代からしか産出しないこと、(2) 恐竜の前肢の三本の指は第 1 - 2 - 3 指であるのに、鳥類のそれは第 2 - 3 - 4 指であるらしいことが、鳥類の恐竜起源説の問題点として指摘されてきた。しかし、(1) は 2009 年のアンキオルニスに始祖鳥よりも古いジュラ紀後期の地層から発見され、(2) は発生学的には鳥類の指も第 1 - 2 - 3 指であるらしいことが近年明らかになりつつあり、いずれの問題点も解消されてきている。2010 年にはアンキオルニスとシノサウロプテリクス *Sinosauropteryx* の羽毛の表面のメラニン色素の形状から、恐竜で初めて色が復元できることが判った。羽毛は恒温動物に進化しつつあった小型獣脚類の保温効果を高めたのではないかと考えられてきた。原始的な段階の「羽毛恐竜」の羽毛に模様やワンポイントのカラーがあったことから、ビジュアルなコミュニケーションの機能も担っていたかもしれない。このことは、爬虫類の脳では視覚よりも嗅覚に比重が高かったのに対して、鳥類の脳では嗅覚よりも視覚の割合の方が高くなっていたこととも整合的である。

「飛ぶかたちの完成品」 ：鳥の秘策

遠藤 秀紀

財団法人 山階鳥類研究所客員研究員
東京大学総合研究博物館教授



よほどのことがない限り、飛行機というものは、誰が見ても「あっ飛行機だ！」と気がつくようなお約束のかたちをしているものだ。もちろんシルエットはそれなりに多様かもしれないが、それらを電車やブルドーザーや貨物船と間違えるものではないだろう。左様、空を飛ぶというのは元々あまりにも困難な所業であって、それを常識を大きく外した不気味なかたちで実現することはできないようなのである。

しかし、今日の主人公は鳥だ。その氏素姓を決めているのは、航空工学の一流のエンジニアが引く精緻な設計図でもなければ、神が作り給うた天馬ペガサスの魔法の解剖図でもない。鳥とは、自然界の厳しい競争の中で「こうでなければ空を生きることはできない」というかたちに追い詰められた、哀れなダーウィン流自然淘汰の残渣なのである。

ここでつねにひねくれている私には、解剖学というプロの仕事が待っている。解剖学とは動物の身体に謎を見つけ、それを解く学問だ。だから私はそんな進化の残りかすの中に、キラリと光るパーツを見つけ出す。意地でも自分の手で鳥のかたちの栄光をつかみ出そうともがくのである。

では、探し求めるまばゆいばかりに輝く鳥のかたちとは何か？ あの誰をも魅了する麗しき翼か？ あの精悍で神々しさすら思わせる眼球か？ あの野山にきらめく美し過ぎる羽毛か？ 否。そのどれでもない。私が鳥の身体に見つけだした至宝は、実は^{あし}肢である。空飛ぶ優雅な鳥の腹面に、田舎の選挙広報の吹き流しほどに無用なはずの肢がある。この肢は、飛ぶ者の持ち物としては、度を超えて間違ったかたちなのだ。白紙にペンを走らせる航空機の設計技師なら、こんな無茶な機械は作らない。せっかく空を掌中に収めながら、死重にしかならない肢をわざわざぶら下げて舞う徒は、この星でただ一つ、鳥たちだけなのである。軽快な飛翔体に怨念のごとくまとわりつく鳥の肢。これこそ、解剖学者が直感的に見つけ出す謎の塊だ。

となれば、我孫子の秋の休日の過ごし方はもう決まった。自然淘汰に追い詰められたこの空飛ぶ被造物の身体にメスを入れ、立派過ぎる肢のかたちに悩むことにしよう。そこに、万に一つ、隠された最高のデザインが見出せることを夢に見て。

山階芳麿賞の紹介

山階芳麿賞とは

● 山階芳麿賞は、財団創立 50 周年にあたる 1992 (平成 4) 年に、山階鳥類研究所の創設者である山階芳麿博士(1900-1989)の功績を讃え、我が国の鳥類学の発展と保護活動に寄与された個人あるいは団体を顕彰するために設けられました。

● 山階鳥類研究所所長を委員長とする本賞選考委員会で贈呈対象者(個人または団体)を選考します(委員会の構成はP.5 下欄を参照)。

● 受賞者には、山階鳥類研究所の総裁、秋篠宮文仁親王殿下から表彰状と記念メダルが贈られます。記念メダルは、表に山階芳麿博士の肖像、裏に本研究所が新種記載した沖縄島の固有種、ヤンバルクイナのレリーフをあしらい、受賞者の氏名が受賞年とともに刻印されます。また、第 12 回(2003 年)の受賞者からは、さらに副賞として「朝日新聞社賞」(賞金 50 万円と盾)が贈られることになりました。

● 歴代受賞者

第 1 回 羽田健三(信州大学名誉教授)*、第 2 回 松山資郎(山階鳥類研究所顧問)*、第 3 回 中村司(山梨大学名誉教授)、第 4 回 黒田長久(山階鳥類研究所所長)*、第 5 回 中村登流(上越教育大学名誉教授)*、第 6 回 正富宏之(専修大学北海道短期大学教授)、第 7 回 樋口広芳(東京大学大学院教授)、第 8 回 山岸哲(京都大学大学院教授)、第 9 回 藤巻裕蔵(帯広畜産大学教授)、第 10 回 小城春雄(北海道大学大学院教授)、第 11 回 中村浩志(信州大学教授)、第 12 回 石居進(早稲田大学名誉教授)、第 13 回 由井正敏(岩手県立大学教授)、第 14 回 長谷川博(東邦大学教授) 第 15 回 立川涼(愛媛大学名誉教授)

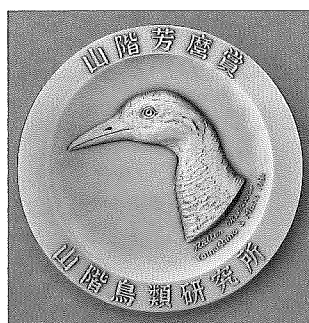
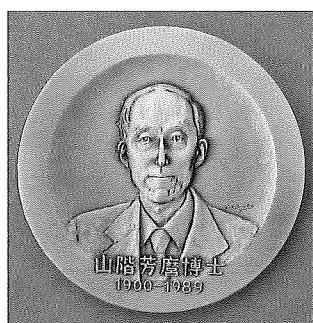
いずれも受賞当時の役職、* 故人

山階芳麿博士について



山階芳麿博士は、1900 (明治 33) 年 7 月 5 日、山階宮菊麿王の第二子として誕生しました。幼い頃から鳥に興味を持ち、陸軍士官学校を経て東京帝国大学(現東京大学)理学部動物学科選科に入學、動物学の基礎を学びました。同選科を 1931(昭和 6)

年に修了、1932(昭和 7)年に山階鳥類研究所の前身である山階家鳥類標本館を設立、鳥類の研究に没頭し、アジア・太平洋地域の鳥類標本の収集にも努めました。1939(昭和 14)年から、北海道帝国大学(現北海道大学)の小熊捍教授の指導で研究を行い、1942(昭和 17)年「鳥類雑種の不妊性に関する研究」で同大学から理学博士号を取得しました。その後、鳥類の染色体の研究に取り組み、染色体を用いる方法を鳥類の分類に導入し、この成果を 1949(昭和 24)年に「細胞学に基づく動物の分類」として出版しました。この研究は、主観的な形態分類に代わる客観的な分類法として国の内外から高く評価され、これにより、翌 1950(昭和 25)年、日本遺伝学会賞を受賞しました。また、研究のみならず鳥類保護にも熱意を注ぎ、日本鳥学会会頭、日本鳥類保護連盟会長、国際鳥類保護会議副会長、同アジア部会長などの役職を歴任しました。1977(昭和 52)年、ノーベル賞受賞者 K. ローレンツ博士などわずかな数人に与えられたジャン・デラクル賞を受賞、翌 78(昭和 53)年には「世界の生物保護に功績があった」としてオランダ王室から第 1 級ゴールデンアーク勲章を受章しました。1989(平成元)年 1 月 28 日没、88 歳。主要著書に『日本の鳥類と其生態』(第 1 巻:1933、第 2 巻:1941)、『世界鳥類和名辞典』(1986)他、論文多数。



山階芳麿賞のメダル

表: 山階芳麿博士の肖像

裏: ヤンバルクイナのレリーフ。

受賞年と受賞者の氏名が刻印される

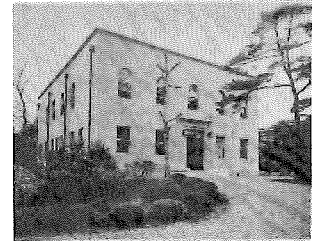
山階鳥類研究所の紹介

山階鳥類研究所の歴史と概要

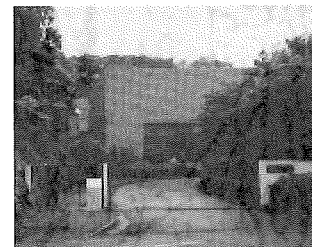
山階鳥類研究所は、山階芳麿博士（1900-1989）が1932（昭和7）年に私費を投じ、東京渋谷南平台の山階家私邸内に建てた鳥類標本館が前身です。1942（昭和17）年に文部省（当時）から許可を得て、財団法人として発足しました。第二次大戦の空襲で山階邸が全焼したにもかかわらず研究所は焼失をまぬがれ、博士の収集した貴重な鳥類標本約2万点が無傷で残りました。戦後は、研究所の小さな建物に日本鳥学会、動物分類学会、日本生物地理学会、日本野鳥の会、日本鳥類保護連盟などの学会や鳥類関係諸団体の事務局が身を寄せ合い再発しました。

山階鳥類研究所は戦前戦後を通じて多くの鳥類研究者を育て、数々の業績をあげましたが、建物が老朽化し手狭になったことから、1984（昭和59）年、千葉県我孫子市高野山の手賀沼畔に移転し、現在に至っています。また1986（昭和61）年からは、秋篠宮文仁親王殿下を総裁としてお迎えしています。

現在、山階鳥類研究所は以下の3つの部門で構成されています。日本最多の鳥類標本と文献を所蔵する機関として、鳥類学者や鳥類研究を志すアマチュアの方々へも研究の場を提供し、鳥類全般に関する科学的研究を行っています。



東京渋谷南平台の旧研究所



千葉県我孫子市の現研究所

自然誌研究室：

鳥類標本約69,000点と鳥類を主とする図書資料約39,000点を所蔵。これら資料の収集と維持管理を行うとともに、標本データベースに形態や色彩の情報を取り込んで高度化する研究にも取り組んでいます。また、鳥類をDNAから識別するDNAバーコーディングや、日本で大半が繁殖するオオミズナギドリ（オオミズナギドリ）の生態や生理の研究など、生態や生理、系統分類など基礎生物学的な研究を行っています。

保全研究室：

鳥類の渡り経路や寿命の解明、環境の長期的モニタリングなどの視点から環境省委託の鳥類標識調査を行うほか、鳥類標識センターとして国内外の調査者の育成、標識データのとりまとめを行っています。アホウドリ類の新繁殖地への誘致活動やヤンバルクイナの生態研究など、希少鳥類の保全のための調査研究を行っています。

事務局：

財団の活動を支えてくださる賛助会員やご寄付の窓口業務、庶務、経理など事務全般を行っています。また、ニュースレターの発行やウェブサイトの作成など、研究所と外部の方々をつなぐ窓口業務を行っています。

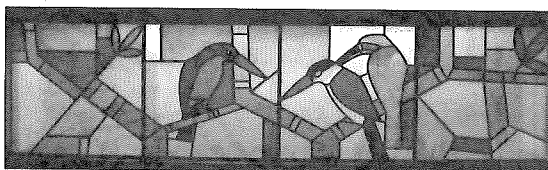
所員数は19名で、そのうち15名の研究員・専門員がそれぞれの部門で研究業務にあたっています。学術雑誌「山階鳥類学雑誌」を年2回、ニュースレター「山階鳥研NEWS」を隔月発行して、鳥類学と地球環境保全の普及啓蒙を行っています。現在、東邦大学大学院、東京農業大学大学院、帝京科学大学大学院と連携大学院協定を結んで、相互に研究協力しています。

● ご支援のお願い

山階鳥類研究所は、日本、アジアをはじめとした膨大な数の鳥類標本、図書資料を所蔵し、内外の研究者にその情報を提供してきました。また、鳥類全般の科学的研究により国際的にも評価されており、ヤンバルクイナの新種記載、コウノトリやトキの保護への参画、アホウドリの保護・増殖事業、標識をつけて放鳥することにより鳥の生態や渡りの経路を調べる標識調査など、多くの活動を行っております。私たちはこれらの活動を通じ、生物多様性の維持、地球環境の保全にも貢献しています。

山階鳥類研究所では、このような活動を支えてくださるためのご寄附を随時お受けしているほか、賛助会員を広く募集しております。賛助会員の方には、山階鳥類研究所の活動をお知らせする「山階鳥研 NEWS」（年6回発行）や、学術雑誌「山階鳥類学雑誌」（年2回）をお届けし、随時開催するシンポジウムなどのイベントのご案内を差し上げるほか、親睦を図る目的で賛助会員の集いを随時開催しています。

賛助会員の方々から頂戴する賛助会費は、上記のような研究活動や標本・図書資料の収集・維持管理などに使われます。日本の鳥類学の発展と鳥類の保護、そして地球環境の保全をめざす私どもの活動を支えてください。皆様のあたたかいご支援をお願いいたします。



賛助会員のご案内

○ 法人賛助会員

（年会費 1 口 5 万円）

「山階鳥研 NEWS」と学術雑誌「山階鳥類学雑誌」をお送りします。

○ 個人賛助会員

（年会費 1 口 1 万円）

「山階鳥研 NEWS」もしくは「山階鳥類学雑誌」のいずれかご希望のものをお送りします。

（年会費 1.5 口 1 万 5 千円）

「山階鳥研 NEWS」と「山階鳥類学雑誌」の両方をお送りします。

入会をご希望の方はお手数ですが、同封のパンフレット「賛助会入会のご案内」にあります申込書にご記入の上、はがきを切り取り、切手を貼らずにお送りください。送金には同封の郵便振替用紙（振込手数料無料）をご利用ください。

なお、銀行または郵便局からの口座振替（自動引落し・振込手数料無料）によるお支払いもできます。ご希望の方には申込用紙をお送りしますので、お申し出ください。

法人賛助会員申込書および詳しい資料の請求も下記へご連絡ください。

山階鳥類研究所では、賛助会員のほかにご寄附も募っておりますので、よろしく願いいたします。

[入会申込み・資料請求の宛先]

〒 270-1145 千葉県我孫子市高野山 115

（財）山階鳥類研究所・事務局

TEL: 04-7182-1101 FAX: 04-7182-1106

E-mail: kaiin@yamashina.or.jp

U R L: <http://yamashina.or.jp>

※ 山階鳥類研究所は特定公益増進法人です。当財団に対する寄附金は、税制上の優遇措置の対象となります。

第 16 回山階芳麿賞贈呈式と記念シンポジウム 「かたちの多様性」

発行日	2010 年 9 月 23 日
編集・発行	財団法人 山階鳥類研究所 千葉県我孫子市高野山 115
印刷	岡田印刷（株）